結　論

Ⅰ．本研究のまとめ

本研究では，明治期から第二次世界大戦終結までの歴史地理学の学説史について,「日本歴史地理研究会系の歴史地理学」と「京都帝国大学系の歴史地理学」という 2 つの系譜を軸として考察を行った。以下において各章の内容を要約することとしたい。

第 1 部では「日本歴史地理研究会系の歴史地理学」に関し，同研究会の機関誌『歴史地理』や関係する歴史地理学者の学説を取り上げた。

まず第 1 章では日本歴史地理研究会の機関誌であった『歴史地理』の意義などについて，明治・大正期を対象に検討を行った。従来，この研究会は，歴史地理学を史学の補助学なり歴史の地理的解釈と位置付けてきたとしてマイナーに評価されてきた。その根拠とされるのは,『歴史地理』1 巻 1 号掲載の設立趣意書に見られる「地理学は史学の眼の一なり」といった言明や「地理は最も価値ある史料の一として，史的事実研究上尠少ならざる光明を与ふるを見るべし」という言明であった。しかしこの言明は，メンバーの一人である小林庄次郎の歴史地理観であり，研究会の創設者である喜田貞吉は歴史地理学を地理学の一部と考え，史学とは明確に区分していた。さらに喜田は『歴史地理』を通じ，自然地理学に対して立ち遅れの感のあった人文地理学の発達をも企図していた。この考えは喜田のみならず，他の主要メンバーにも共有されていた考えであった。しかし喜田らの意図に反し,『歴史地理』は同時代の地理学者や歴史学者からは歴史学の雑誌とみなされ，地理学の雑誌とは評価されなかった。結果的にこの雑誌は社会経済史や考古学, 郷土史, 歴史学の補助学としての歴史地理の発達には貢献したが,（人文）地理学の発展には貢献できなかった。

第 2 章では,「日本歴史地理研究会系の歴史地理学」の中心人物である喜田貞吉を取り上げた。喜田は東京帝国大学大学院で歴史地理学を専攻し，卒業後は東西の両帝国大学で国史地理を講義するなど，歴史地理学に深く関わった研究者である。幸い喜田に関する貴重な資料群が徳島大学附属図書館に保管されていたことから,特にその中の講演録と講義ノートに基づいて喜田の再評価を試みた。従来，喜田の歴史地理学は歴史の地理的解釈であるとして地理学者からは周縁に位置づけられてきたが，喜田自身は歴史地理学を地理学の一分野と見なし，史学とは明確に区分していた。さらに歴史地理の研究は人文地理学の活性化を目指すものでもあり，これが日本歴史地理研究会創設の背景にあった学問観でもあった。しか

しこのような学問観に反して，実際の喜田の歴史地理研究は歴史学や考古学，民族学そのものであったり，歴史の地理的解釈（地理的歴史学）であることが多く，このため同時代の地理学者からもその研究が地理学であるとはみなされていなかったようである。喜田の学問観は近代的な学問体系に即したものであったが，その研究内容は必ずしも近代的な意味での歴史地理学ではなかったといえる。

第 3 章では，同じく日本歴史地理研究会の創設メンバーの一人，原　秀四郎を取り上げた。原は今日の地理学界からは「忘れ去られた」地理学者であるが，わが国で初めて歴史地理学で博士学位を取得した人物であり,『日本国史地図　附日本国史地理』という日本歴史地図・歴史地理の概説を刊行するなど，歴史地理学史において特筆すべき人物であると考えられる。喜田ら研究会のメンバーの研究が，結果的に歴史の地理的解釈に終わったのが多かったのに対し，原の歴史地理学は今日の視点から見ても価値を失わない優れた研究であり，特に『史学雑誌』に掲載された博士論文の一部「玉造塞趾に就きて」は白眉である。原は博士学位を取得した後，いくつかの著作を発表したり，國學院などで国史地理を講じたりしたが，42 歳という若さで没したこともあって，その学問はあまり大きな影響を及ぼさなかったと考えられる。

第 4 章では，吉田東伍の歴史地理学とその後継者について考察を行った。吉田は著名な『大日本地名辞書』を著した独学の研究者として知られるが，これまでその後継者は少ないとされてきた。ここでは吉田が約 13 年間教鞭をとった東京専門学校・早稲田大学での教育活動と主たる受講生について検討を行い，吉田の後継者養成の実態について考察した。吉田は明治 34（1901）年に地理学担当の喜田貞吉の後任として同校に就任し,日本地誌をはじめ歴史地理,国史などを講じた。しかし次第に歴史関連の担当科目が増え，明治末には担当科目は歴史関連のみとなっていた。このため吉田の後任は地理学者ではなく歴史学の西村眞次であった。また受講生から蘆田伊人，高橋源一郎，横井春野らの研究者が誕生したが，吉田の歴史地理学を継承したのは高橋ただ一人であった。高橋は昭和 3（1928）年より『武蔵野歴史地理』を著したが，その学問は歴史地理学というより郷土史（誌）として発展していった。また，高橋は在野の研究者で特定の大学などに身を置かなかったことから，吉田の歴史地理学は「学派」のような形で発展することはなかったといえる。

第 5 章では，奈良の歴史地理家である今西伊之吉を取り上げた。今西は明治・大正期において，郷土奈良（大和）で小学校教師をしながら歴史地理研究，郷土史研究を進めた人物である。日本歴史地理研究会の創設後まもなく加入し，研究会を通じて知った喜田貞吉を慕って上京して東京専門学校（現，早稲田大学）で喜田の講義を受講した。帰郷後は喜田の平城京や大和条里の研究のために資料を収集・提供するとともに，自身も喜田の研究成果を踏まえて『高市郡史蹟略考』などの大和歴史地理研究を発表している。このように日本歴史地理研究会の創設以降,研究会をきっかけとして喜田などの中央の研究者と地方の知識人が交流し，知見を交換する状況が生まれた。しかしこの交流は，郷土史の発展には大きな役割を果たしたが，今日の歴史地理学とは別の系譜として捉えるべきであろう。

第 2 部では,「京都帝国大学系の歴史地理学」に焦点を当て，この系譜に属する歴史地理学者について考察を加えた。

まず第 6 章では，明治 40（1907）年に設立された京都帝国大学地理学教室の初代助教授であった石橋五郎の人文地理学・歴史地理学を取り上げた。石橋は東京帝国大学史学科で学んだが，在学中に地理学に目覚め，卒業論文では歴史地理学的なテーマに取り組み，大学院在学中も雑誌『歴史地理』に研究を発表するなど，地理学者としての出発点は主に歴史地理学にあった。しかし近代的人文地理学の確立を目指す石橋は，ともすれば歴史学に従属しがちであった歴史地理学から徐々に距離をおくようになり，京都帝国大学着任以降は研究の重心が「過去」から「現在」に移行し，明治 41 年の講演会「武庫地方に於ける集落の変遷」では，現在地域を理解するための歴史的研究という立場，すなわち歴史的考察を重んじる人文地理学の立場を鮮明にした。現在を明らかにするための変遷史的考察という研究方法は，その後の歴史地理学の主要な理論の一つともなった。

第 7 章では,小牧実繁の歴史地理学理論とその実践内容に関する考察を行った。小牧は大正 8（1919）年に入学した京都帝国大学で地理学教室の小川琢治や考古学教室の浜田耕作などに師事し，先史地理学の研究を進めた。当初は地人相関論に基づく歴史地理学を主張していたが，昭和 8（1933）年に発表した岩波講座・地理学『歴史地理学』で大きく理論転換し，著名な「時の断面」説を提唱するようになった。「時の断面」説とは，歴史地理学の使命を過去のある時代における地域・景観を復原描出にあるとする考えで，京都帝国大学での受講生・松井武敏の地理学観の影響を受けたものであった。しかし興味深いことに，小牧は昭和 8 年の理論転換の前と後とで，実践的研究の内容があまり変わることはなかった。小牧は昭和 8 年以前も事実上,「時の断面」説に基づく研究を行っており，昭和 8 年以後も否定したはずの地人相関論的な研究を行っていた。小牧は昭和 13 年頃より日本地政学に傾斜し，同 20 年には京都帝国大学を辞任したため「時の断面」説を十分深めることはなかったが，門下の米倉二郎や藤岡謙二郎などがそれを継承し，結果的にわが国の歴史地理学の基本的思考となった。

第 8 章では，昭和初期に京都帝国大学文学部史学科で学び，歴史地理学者として大成した米倉二郎について考察した。具体的には米倉が史学科，特に地理学教室の教官からどのような学問的影響を受けたかなどについて詳細に検討した。米倉は史学科で多くの教官の講義を聴いたり指導を受けたりしているが，若き頃の米倉に大きな印象を与えたのは，当時理学部に転出していた小川琢治をはじめ，地理学教室の石橋五郎，小牧実繁，国史学教室の喜田貞吉などであった。特に小川からは条里研究への関心や中国などとの比較研究の視点を継承し，小牧からは歴史地理学理論である「時の断面」説を継承した。この視点は昭和 35（1960）年に刊行された条里研究の集大成である『東亜の集落』にも引き継がれており，米倉が小川-小牧の系譜に連なる歴史地理学者であることが明らかとなった。

以上，2 つの系譜に関わる歴史地理学者について，その人と学説に対する考察を行った。

このように近代日本の歴史地理学界は 2 つの系譜に属する多様な研究者が活躍

し，まさしく百花繚乱の状況であった。まず日本歴史地理研究会系については，研究会を創設した喜田貞吉ら東京帝国大学国史科の関係者をはじめ，独自に地誌編纂を進めた吉田東伍などの研究者，郷土にあって地元の歴史地理研究に従事した郷土誌（史）家が活躍し，それぞれの観点から歴史地理研究を進めていった。結果的にその研究は地理学というより歴史学の範疇に含まれることが多かったものの，近代日本の歴史地理学界において確実に一つの潮流を形成した。一方で京都帝国大学史学科の地理学教室では，初代教授の小川琢治，助教授の石橋五郎らによって歴史地理研究を伝統とする学風が醸成されていった。この学派には初期の頃より 2 つの流派が存在しており，一つは石橋に代表される，現在地域を明らかにするための歴史地理学（人文地理学の歴史的方法）であり，もう一つは小川門下の小牧実繁による過去を明らかにするための歴史地理学である。しかしいずれの流派も歴史学からの独立を主張し，地理学の立場を堅持していた点で特徴があった。それは日本歴史地理研究会系とは異なる，もう一つの大きな潮流であった。

Ⅱ．現代歴史地理学史との関わり

本研究では日本歴史地理研究会系，京都帝国大学系という 2 つの系譜について論じたが，このうち現代歴史地理学に連なるのは後者の系譜である。

日本歴史地理研究会はもともと地理学の一分野としての歴史地理学の研究を目指したものの，同時代の地理学者から歴史学の学会とみなされており，賛同・参画する地理学者は多くはなかった。機関誌『歴史地理』も当初は歴史地理の論文を意識的に掲載していたが，次第に歴史雑誌としての性格を強め，大正末に地理学専門雑誌が誕生すると,『歴史地理』は地理学雑誌とは呼べない内容の存在となった。この系譜の歴史地理学は大正から昭和初期以降における社会経済史や考古学，郷土史，民俗学などの発展の伴い，その分野に吸収され，その中で発展していったと見るべきであろう。戦後,『歴史地理』の刊行は断続的となり，昭和 51（1976）年をもって事実上の終刊となった。昭和 47 年発行の『歴史地理』の編集後記には，当時の会長であった岡田章雄によるコメントがある。そこには「戦後歴史地理学の伝統が見失われ，とかく地理学の分野に吸収される傾向が目立っていますが，史学の一環としての歴史地理学の重要性をもっと若い世代に訴える必要のあることを痛感しております」[1] と見られ，まさしく当時の状況を言い表した表現と言えよう。

一方の「京都帝国大学系の歴史地理学」は，すでに述べたように現代歴史地理学と連続性を有する系譜である。地理学の一分野としての歴史地理学を目指した点は日本歴史地理研究会系と同じであったが，着実にそれを実現していった点において大きな差があった。この系譜には当初より 2 つの流派が存在することはすでに述べたが，戦後，それぞれが独自に発展を遂げていった。まず石橋五郎の歴史地理学，すなわち現在地域を明らかにするための歴史地理学を継承・発展させたのは内田寛一である。内田は主として東京文理科大学（現，筑波大学）で歴史

地理学を講じ，同校を拠点として地理性の強い歴史地理学を普及させていった[2)]。一方，過去の「時の断面」における地域や景観の復原を特徴とする小牧の歴史地理学は，米倉二郎や藤岡謙二郎などによって継承され，特に藤岡は戦後，京都大学を拠点として,小牧の理論を発展させた景観変遷史法を実践していった。戦後，両者はそれぞれ「大塚学派」と「京都学派」として発達したが[3)]，いずれの学派も京都帝国大学地理学教室をルーツとしていたことは興味深い事実である。今日ではこの 2 つの学派から巣立った多くの歴史地理学者が全国に広がり，実にさまざまな教育・研究機関において歴史地理学研究が試みられている。

Ⅲ．今後の課題

最後に今後の課題について触れておきたい。

1 点目は，本研究で取り上げられなかった研究者に関する考察である。まず日本歴史地理研究会系については，東京帝国大学国史科・史学科の関係者である坪井九馬三や久米邦武，天坊幸彦など興味深い歴史地理学者は少なくない。特に坪井は，第 1 章でも触れたように帝国大学史学地理学講座を主宰した日本の歴史地理学のパイオニアの一人として，本格的な地理学史的考察をするに値する人物であろう[4)]。また地誌家としては，吉田東伍のほかにも『日本地理志料』を著した村岡良弼や『上代歴史地理新考』の著者井上通泰など重要な研究者がいる。地理学史からの研究があまり行われていないだけに重要である[5)]。また郷土誌家についても，栃木の田代善吉（黒滝），奈良の田村吉永などの歴史地理研究も検討に値すると思われるが，これまで地理学史の立場からは言及されていない。今後の課題としたい。

また京都帝国大学系の歴史地理学については，やはり小川琢治を取りあげるべきであろう。小川は京都帝国大学地理学教室に史的考証の学風を持ち込んだ研究者であり，その意味では歴史地理学京都学派の祖とも評すべき地理学者である[6)]。小川の歴史地理研究は幅広いが，特に中国歴史地理に関する研究はその後東方文化学院京都研究所（現，京都大学人文科学研究所）の森　鹿三などの歴史地理学的研究に継承された経緯があり[7)]，より深く京都学派の実態を明らかにする上で重要なテーマである。加えて内田寛一，藤田元春などの重要な歴史地理学者についても，その学的生涯や業績に関するさらなる論究は地理学史上不可欠であろう[8)]。

2 点目の課題としては，これら 2 つの系譜に属さない歴史地理学者の検討である。代表的な例としては，在野の地理学者・小田内通敏があげられる[9)]。小田内は東京高等師範学校地理歴史専修科で歴史学や社会学に志し，卒業後に奉職した早稲田中学在職中に歴史学から地理学へと移行したが，その過渡期に大きな影響を与えたのが日本史学者の三宅米吉の歴史地理研究であった[10)]。また，研究にあたっても歴史的考察を重んじていたことが知られており[11)]，広い意味で歴史地理学者とも評価しうる研究者である。小田内は日本歴史地理研究会の会員であった

が[12]，あまり積極的には参画しておらず，日本歴史地理研究会の系譜に属するとはいえない。近代日本の歴史地理学史の全体像を明らかにするためには，小田内などの 2 つの系譜に属さない歴史地理学者にも着目していくことが不可欠であると思われる。

3 点目は，現代歴史地理学との関わりについての本格的な検討である。現代の歴史地理学と連続性を有するのは「京都帝国大学系の歴史地理学」であることは既述の通りであるが,その連続性の実態についてはより詳細な論究が必要である。特に「京都学派」と「大塚学派」に関する考察がポイントになると思われるが，この点については今後の課題としたい。一方で「日本歴史地理研究会系の歴史地理学」が完全に消滅したと見るのは早計に過ぎると思われる。昭和 51 年に日本歴史地理学会が事実上消滅した後も，歴史学の分野において空間への関心が厳然として続いているのも事実である。必ずしも歴史地理学という名の下で行われていたわけではないが，現在でも歴史研究において空間を分析視角に取り込む研究者は少なくない。特に 1980 年代前後における都市史研究の勃興が一つの契機となって，歴史学において空間への関心が高まった経緯がある[13]。この系譜の「歴史地理学」についても，今後現代史学史との関わりの中で丁寧に検証を重ねていく必要があろう。

以上の諸課題に取り組むことで今後，現代も視野に収めた日本歴史地理学学説史の解明を目指すこととしたい。そのことは同時に，近現代日本地理学史の全体像の解明に資することになると考える。

【注】

---

1) 岡田章雄「編集後記」歴史地理 92-2，1972，138 頁。

2) ①藤岡謙二郎「歴史地理学研究の回顧と反省」(同『回想と自己批判』大明堂，1978)，9 頁，②菊地利夫「内田寛一教授の歴史地理学上の位置と学風」歴史地理学紀要Ⅰ，1959，12-15 頁。

3) 黒崎千晴「菊池利夫教授と歴史地理学」歴史人類 9（菊池利夫先生　千葉徳爾先生退官記念集)，1980，7 頁。

4) 坪井については，以下の文献で論及されている。①吉田敏弘「史学地理学講座における近代人文地理学導入の系譜」(京都大学文学部地理学教室編『地理の思想』地人書房，1982)，197-201 頁，②岡田俊裕『日本地理学人物事典[近代編１]』原書房，2011，79-85 頁。

5) このうち井上やその著作については歴史地理学者の足利健亮や金田章裕が簡単に紹介している。足利健亮「井上通泰」(藤岡謙二郎・山崎謹哉・足利健亮編『日本歴史地理用語辞典』柏書房，1981)，34 頁，金田章裕「井上通泰（1866-1941）『上代歴史地理新考』南海道・山陽道・山陰道・北陸道編・東山道編，三省堂，1941-43」(黒田日出男他編『日本史文献事典』弘文堂，2003)，161-162 頁。

6) 小川に関する先行研究としては序論の注 29)，31）を参照。

7) 京都大学文学部地理学教室編『京都大学文学部地理学教室百年史』ナカニシヤ出版，2008，21 頁。

8) 内田と藤田については次の先行研究がある。前掲 2）②12-29 頁，前掲 4）②

306-313 頁（藤田元春），393-399 頁（内田寛一）。

[9] 小田内に関する先行研究としては①岡田俊裕「小田内通敏の地理学研究―在野的・非主流派地理学の形成―」地理科学 50-4，1995，233-249 頁，②同「戦中・戦後の小田内通敏」季刊地理学 48-1，1996，14～32 頁。いずれも③岡田俊裕『日本地理学史論―個人史的研究』古今書院，2000 に所収。

[10] 前掲 9）③143 頁。

[11] 前掲 9）③181 頁。

[12] （無署名）「日本歴史地理研究会々員名簿」歴史地理 2-3，1900，附録 3 頁。

[13] 成田龍一「空間論と歴史研究」（水内俊雄編『歴史と空間』（シリーズ人文地理学 8）朝倉書店，2006），117-138 頁。